

ものみの塔の「忠実で思慮深い奴隷」級 教理が致命的である聖書的根拠 【いわゆる「統治体」の終焉を決定づける論拠】

この記事は『マタイ24章の「例え話」の真意 シリーズ3部作』と題する記事を準備中、その一部の抜粋を含め、JW 関連の読者向け専用として新たに構成したものです。引用聖句は、特にことわりのない限り全て「新世界訳」からの引用です。

初めにマタイ 24:45-51 を引用しておきましょう。

「45「主人が、時に応じてその召使いたちに食物を与えさせるため、彼らの上に任命した、忠実で思慮深い奴隷はいつたいだれでしょうか。46 主人が到着して、そうしているところを見るならば、その奴隷は幸いです。47 あなた方に真実に言いますが、主人は彼を任命して自分のすべての持ち物をつかさどらせるでしょう。48「しかし、もしそのよこしまな奴隷が、心の中で、『わたしの主人は遅れている』と言い、49 仲間の奴隷たちをたたき始め、のんだくれたちと共に食べたり飲んだりするようなことがあるならば、50 その奴隷の主人は、彼の予期していない日、彼の知らない時刻に来て、51 最も厳しく彼を罰し、その受け分を偽善者たちと共にらせるでしょう。そこで彼は泣き悲しんだり歯ぎしりしたりするのです。」

次に引用するのは、それまでの「忠実で思慮深い奴隷」に関する教理を変更して、新たに採用した特集記事である「ものみの塔」(研究用) 2013年7月15日号 「忠実で思慮深い奴隷はいつたいだれでしょうか」 20ページ2節からの引用です。

「イエスをご自分の臨在のしるしを述べた際、「忠実で思慮深い奴隷」を用いて、召使いたちに『時に応じた食物』を与えさせる、と言われました。」



「忠実で思慮深い奴隷を用いて」任命するにあたって事前に「忠実」さや「思慮深さ」を示しているものを選定したということになっていますが、この喩え全体を注意深く読むと、この捉え方そのものが間違っていることに気づくはずですが。

24:45 は関係代名詞「ギリ語：ホン (whom)」を挟んで2つの文節からなっています。まず、先行詞は(忠実で思慮深い)「奴隷」です。そしてカンマで区切られ、続いてその関係詞節(さらに詳しい説明となっている文)が召使いに食物を供えるという仕事を任せました。という部分です。

45 Τίς ἄρα ἐστὶν ὁ πιστὸς δοῦλος , καὶ φρόνιμος , ὃν κατέστησεν ὁ κύριος ἐπὶ τῆς οἰκετείας αὐτοῦ , τοῦ δοῦναι αὐτοῖς τὴν τροφήν ἐν καιρῷ ?
Who then is the faithful servant and wise whom has set the master over the household of him - to give to them the food in season

つまり、まず、「賢くて忠実な奴隷は誰か？」と訪ね、「それはつまりこれこれの僕のことだけど」という構成になっています。

「忠実で思慮深い奴隷」が「誰」なのか分かっていないということです。

まだ証明されていないからです。

「仕事を任せる一つの目的は、それを身をもって証明するために課されたテストとしての役割を持っているということです。

そのことが解りやすく訳されているのは例えば次の翻訳です。

「主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいどれでしょうか。」 - 新改訳

「(旅行に出かける) 主人が一人の僕を奉公人たちの上に立て、時間時間に食事を与えさせることにした場合に、いったいどんな僕が忠実で賢いのでしょうか。」 - 塚本訳

それで、奴隷たちのその認可はキリストが到来された時「そうしている」奴隷が、その時点で初めて「忠実で思慮深い」とみなされるわけで、その時までは、地球上に「忠実で思慮深い」と認定される人間は存在しません。

決して、仕事を任せる時点で、これが「忠実で思慮深い」と認めた奴隷を選んだのではありません。

もし「忠実で思慮深い奴隷」を用いて、召使いたちに『時に応じた食物』を与えさせ」たのなら、よこしまな奴隷はどうなのでしょう。仲間を打ち叩くようになることを想定した上で「よこしまな」人格を持つものを予め選定したのでしょうか。

という疑問が当然湧いてきます。

「ものみの塔」はその疑問を予期していたからか、続きでこう説明しています。

イエスは、終わりの日に、よこしまな奴隷級が存在するようになる、と言っておられたのでしょうか。そうではありません。…

イエスは、よこしまな奴隷を任命するとは言われませんでした。このイエスの警告は、実際には、忠実で思慮深い奴隷に向けられたものです。…」イエスはその警告を、「もし」という言葉で始めていることに注目してください。ある学者は、ギリシャ語本文のこの部分は、「事実上、仮定の話である」と述べています。イエスはいわば、「忠実で思慮深い奴隷が仲間の奴隷たちをこのように虐待することがあれば、主人は到着した時にこれこれの

つまり、「よこしまな奴隷」の話は、単なる脅しであって預言的な意味はないと断言しています。一体「ものみの塔」の人は聖書を読んだことがあるのでしょうか。

それともこれは、苦し紛れの方便なのでしょうか。

こうまで言われちゃ仕方がないので、少し長くなりますが、関連した例えを引用することにします。

次に上げる聖句はすべて、終末期の同一の出来事について語られているものです。

【小麦と雑草】

「それを火の燃える炉の中に投げ込みます。そこで彼らは泣き悲しんだり歯ぎしりしたりするでしょう。」 - マタイ 13:42

【魚の引網】

「彼らを火の燃える炉にほうり込むのです。そこで彼らは泣き悲しんだり歯ぎしりしたりするでしょう。」 - マタイ 13:50

【王の婚宴】

「そこで王は僕たちに言いました、『その手足を縛って彼を外の闇に投げ出さない。そこで彼は泣き悲しんだり歯ぎしりしたりするであろう』。

「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ないのです」。 - マタイ 22:13,14

【10人の処女】

「彼は答えて言いました、『あなた方に真実を言いますが、わたしはあなた方を知りません』。

- マタイ 25:12

【タラント】

「それで、この何の役にも立たない奴隷を外の闇に投げ出さない。そこで彼は泣き悲しんだり歯ぎしりしたりするであろう』。 - マタイ 25:30

【狭い戸口】

「あなた方は外に立って戸をたたき始め、『だんな様、開けてください』と言います。しかし、彼は答えてあなた方に言うでしょう、『わたしはあなた方がどこの者か知らない』。そのときあなた方は言い始めます、『わたしたちはあなたの前で食べたり飲んだりしましたし、

あなたはわたしたちの大通りで教えてくださいました』。しかし彼はあなた方に語ってこう言うでしょう。『わたしはあなた方がどこの者か知らない。不義を働く者たちは皆、わたしから離れ去れ!』アブラハム、イサク、ヤコブ、およびすべての預言者が神の王国にいるのに自分が外に投げ出されているのを見るとき、そこであなた方は泣き悲しんだり歯ぎしりしたりするでしょう。ルカ 13:25-28

「一方、王国の子らは外の闇に投げ込まれるのです。そこで彼らは泣き悲しんだり歯ぎしりしたりするでしょう」。- マタイ 8:12

「しかしその時、わたしは彼らにはつきり言います。わたしは決してあなた方を知らない、不法を働く者たちよ、わたしから離れ去れ、と。」- マタイ 7:22

預言的な例え話のほとんどは「終末」に関するものです。

それはキリスト到来の直前のごく限られた時期の「ただ一つの同一の出来事」を示すために、様々な角度から捉えるための1面であるということです。

ですから、それぞれの例えは互いに補う追加情報的な要素はありますが、相矛盾することはありません。

特に、すぐ後に話された「タラント」の話でも「外に追い出され、泣いて歯ぎしりする」ことになる奴隷も含め全員がタラントは託されています。

これでもまだ「ものみの塔」は「よこしまな奴隷」に限って「泣き悲しんだり歯ぎしりしたりする」というのが単なる「警告」に過ぎず「イエスは、終わりの日に、よこしまな奴隷級が存在するようになると言っておられたのではない」と言い張るつもりなのでしょうか。

もしも、こうだったらこういう結果になるから気をつけるようにというつもりであったなら、もっと簡潔に語られるはずでしょう。

しかし、極めて具体的かつ詳細に、その心の動機、行動、悲惨な結末やキリストの感情、扱いについて述べられています。

45 から 51 節までの全体7節の内の4節、話の半分以上が、実際には存在しない者に対する者に対する描写であるはずがないでしょう。

「ものみの塔」にとっては、「忠実で思慮深い奴隷」の話だけは、自分たちの権威の拠り所となるゆえに、他のたとえ話とは別格である必要があり、この話しの中の「よこしまな歯ぎしりする奴隷」だけは他の話の「歯ぎしり奴隷」とは全く無関係な別物と決めつけているわけですが、「一つの嘘をつき通すには、100の嘘を重ねる事になる」に似て、もの

みの塔は「統治体」やら「組織」の聖書的正当性を主張しようとするあまり、他の様々な聖句を捻じ曲げ続けなければならない状況に陥っているのです。

終末期の結果として生じるとされる他の預言（預言的な例え話を含む）は一貫して、特定のグループではなく、クリスチャン全員が福音を託され、クリスチャンとして保つべきものがあり、目覚めているよう諭されています。

人が聖書を読む際、念頭に置いておくべき一つの点は、「例え話」と他のストレートな描写の違いをきちんと踏まえておくということです。

たとえ話自体は、架空の物語であり、登場人物やその言動も比喩的なものです。また、幾つかの「例え話」では、「畑は世界です」とか「収穫は事物の体制の終結」などとそこで用いられた単語が現実は何を表しているかをストレートに明かしているものや、ヒントになると思える別の話を付け加えられるなどの記述もありますが、「忠実で思慮深い奴隷」の話では、それらの追加情報は一切ありません。なぜ、ないのでしょうか。それは必要ではないからに他ならないからでしょう。

また、聞いていた弟子たちも、これらの例えの「奥にある意味」などについて何も訪ねたりはしていません。なぜでしょうか。これらの話の意図を十分に理解したからに違いないでしょう。ですから、一つ一つの語句を取り上げて解釈を加えたり詮索したりして、別の物語を作り上げるのは無意味と悟るべきなのです。

この喩えを話された目的や適用に関して、論をまたない（聖書を何度か読んだことのある人なら誰でもそれと分かる推論）と思えるのは、一つの前の聖句にある「このゆえに、あなた方も用意のできていることを示しなさい。あなた方の思わぬ時刻に人の子は来るからです。」(25:44) という表現から、目覚めていて「用意のできている」ということの意味、また「人の子の思わぬ時の到来」という表現から例えの「主人」はキリストを、主人の帰宅は「キリストの到来」を表していることは分かります。

しかし、どの喩えの場合もそうですが、聖書そのものに明確に示されているのでない限り、人物や出来事を現実の世界に適用し、用語を特定することには注意が必要でしょう。例え話のストーリーや語句一切が100%現実に当てはまるという例はありません。大事なものは、その話の「目的」を掴むことです。そしてそれは大抵、話の結論として「同じように…」 「ですからあなた方も…」などと例

えの適用がなされている表現から分かります。

「忠実な奴隷」の例えも、目覚めていたゆえに「そうしている」か「予期していなかった」ゆえに不興を被るかの対極を示すためですから、これが現実に誰を現すとか、何年に任命されたか、などを特定することを意図して語られたという聖書的根拠はないでしょう。

先に、たとえ中の主要な単語が現実に何を指すかについての付加情報がないのは、その必要がないからに違いないと述べました。

語られた当の本人が望まれたわけでも、意図したわけでもないことに不思議な光を当て、鋭い注意を向け、勝手に特定あるいは断定するようなことは慎むべきではないでしょうか。目の付けどころがシャープなつもりで、実際にはズレているということです。

例えと普通のストレートな表現を何の区別もなくゴチャ混ぜにして論じるというのが常に見られる「ものみの塔」の癖と言えます。

「例え」はあくまで「例え」であって、その表現が現実に 100%当てはまることはないということをもう少し拾い上げてみましょう。

話そのものが実際に示しているのは食物を与えるだけ者(奴隷)と受けるだけの者(召使い)です。

実際の所、時に応じて食物を分配することが、いわゆる「霊的な食物」を供給することを意味しているとしても、現実の歴史や、預言の中で、一つの群れの羊であるクリスチャンが、食物をもつぱら与える側ともつぱら受ける側に二分されるという考えは、聖書中どこにも示されていません。

こんな「言うまでもない」ことをわざわざ書いているのは、「ものみの塔」的思考が、いかに愚かしいのかを実証する必要があるそうだからということなのです。

「愚鈍な者にはその愚かさにしたがって答えよ。彼が自分の目から見て賢い者とならないためである。」一箴言 26:5

この箴言に従って、私も単語を一つ一つ現実に当てはめてみることにします。

まず、主人の「召使い」とは誰ですか。

仏教徒ですか、無神論者ですか。他ならぬクリスチャンでしょう。

主人が帰宅した時、「忠実で思慮深い」ことを実証したクリスチャンと、「よこしま」であることが露呈したグループに注目されます。

では、主人の「召使い」はどうみなされたのでしょうか。

人数として食物を受ける側と配膳係では、常識的に考えても圧倒的に受ける側の方が大勢でしょう。

全てのクリスチャンは「目覚めている」べき人々です。

しかし、圧倒的大多数の「召使い」級クリスチャンは、目覚めていたのかどうかすらわかりません。当然どんな結果が彼らに及ぶのかも何も触れられてはおりません。

忠実でも、思慮深くも、よこしまでもない、別にどうでも良い立場に置かれているのです。ごく少数の配膳係だけが、報いを受け、別の悪い配膳係は厳しい処罰を受け、大多数のクリスチャンは放ったらかしです。

ともかく、この例えからすればそういうことになります。

この一点からだけでも、こうした捉え方、適用の仕方はナンセンスであり、愚かしい間違いであると言えます。

キリストの追随者に関連して、聖書中のあらゆる箇所で、キリスト到来の際に裁きがなされ、受け入れられるクリスチャンと退けられるクリスチャンに二分されることが示されています。

何の扱いもなく放ったらかされる、大多数のクリスチャンが存在することはありません。

このことから、今更言うまでもありませんが、これは「例え話」であり、ある論点を印象的に際立たせるためのフィクションです。

「召使い」という存在を云々することがナンセンスなのと同様「忠実で思慮深い」奴隷が現実の個人やグループを指し指名しているかなどという発想そのものが非聖書的だということがわかります。

「召使い」級という具体的な対象がフィクションなのと同様、「忠実で思慮深い奴隷」もフィクションなのです。なぜなら、それらの「忠実さや賢さという特質や、食物を配るという行為」そのものも他ならぬ「召使い」という存在故に成り立っているもので、「召使い」なしでは「忠実で思慮深い奴隷」も存在し得ないからです。

あくまで「例え話」上での登場人物であり、「召使い」について何も言及がないのは現実世界では何も意味していないのと同様、「忠実で思慮深い奴隷」という役名も現実世界においてはなんら意味あるものではありません。

ただ注目すべきは、この例えでキリストが伝えたかったこと、すなわち「目覚めていて用意のできていることを示す」ということを思いに止める。ただそれだけです。

「奴隷」の「任命」に関して。

「任命」と訳されているのは「ギ語：カティステイミー」で、主人到着後「すべての持ち

物を司らせる」つまり「奴隷」が「王また祭司」という立場になるということなら、「任命」と表現しても相応しいでしょう。

しかし「カティステイミー」は「任命」とも訳し得るだけで、そうした日本語のニュアンスに限定されているわけではありません。

「カティステイミー」の基本的な意味は「〇〇とする」という意味です。

この語が他にどのような単語に訳されているか「新世界訳」から見てみましょう。

「パウロを【案内】(カティステイミー)した人たちは彼をアテネまで連れて来た」-使徒 17:15

「一人の人の不従順を通して多くの者が罪人【とされた】(カティステイミー)のと同じように、一人の方の従順を通して多くの者が義【とされる】(カティステイミー)のです」-ローマ 5:19

「舌は火なのです。舌はわたしたちの肢体の中で不義の世界を【なして】(カティステイミー)います。」ヤコブ 3:6

「だれでも世の友になろうとする人は、自分を神の敵【としている】(カティステイミー)のです。」ヤコブ 4:4

「主イエス・キリストについての正確な知識に関して無活動【になったり】(カティステイミー)…」Ⅱペテロ 1:8

幾らか引用してみても明らかなようにこの語の本来の意味は「…にする、役割を付す、託す、任せる、結果、因果応報的」というニュアンスを持つ語です。

同じ語なのに、これらの聖句では「任命」と訳していないのはなぜでしょうか。

パウロがアテネへ行くように「任命」された訳ではありません

「舌は火である」という表現も一種の「例え」です。舌は不義の世界に「任命」されているのでしょうか。では歴史上のいつから「舌」は「不義の世界」に任命されたのでしょうか。…などという観点はナンセンスでしょう。

アダムのゆえに人類が罪人に「任命」されたとか、世の友になろうとする人は、自分を神の敵に「任命」したと訳さないのは、文脈からみて不適切だからです。

「係の人に自分の席に任命してもらった」などと表現しないのはなぜでしょうか。

日本語では「任命」と「案内」はまったく異なる意味の単語だからです。

もちろん翻訳者はその文脈で最も適切と思える訳語を選ぶわけですが、一度その訳語で読まれ理解されると、その訳語の持つ特定の意味付けが固定されることとなります。

そしてそのイメージはそれぞれの単語の持つ様々な意味合いを考慮して選択するわけですが、それが翻訳される時、ある特定の意味以外の他のニュアンスなどはすべて切り捨てられることとなります。

「任命」という語の意味やそのニュアンスはどのようなものでしょうか

特別な立場、権威を与えられる、JW 的な表現で言えば「特権が与えられる」というイメージでしょう。

では、マタイ 24:45 の「奴隷」が「任命」されるという訳し方は、適切なものでしょうか。

例え話では主人が出かける際にその仕事を特定の奴隷に任せたとありますが、では召使いに定期的な食事を供する仕事は、それまで誰が行っていたのでしょうか。

それぞれ各自で？ ならばあえて「奴隷」に委託する必要はないでしょう。

では「主人」が一人でそのすべてを行っていたということでしょうか。

絶対には断言できませんが、普通に考えて、それまでも普通に奴隷の中の調理係などの特定の人か、あるいは交代制で行われていたに違いありません。

臨時雇いにしろ、住み込みにしろ、「奴隷、家令」がその他の「奴隷、召使い」のための食事の世話をするのはありふれた光景で極めて日常的なことだったはずです。

奴隷が他の召使いの食物を世話するように頼まれることは「任命」という語句で表現されるような特別なことではありません。

祭司職や政治的な役職とかなら「任命」という語で適当かもしれませんが、よく考えてみてください。「奴隷」「家令」というのは現代での立場で言えば、良くて「従業員」もしくは、パート、アルバイトのようなものではないでしょうか。

あるいは、仲間の食物を配ることに似たような光景として今日見られるのは、小学校の「給食当番」の係でしょう。

メニューくらいは「担当奴隷」が考えるかもしれませんが、食材も調理器具も一切は「主人」が備えたものでしょう。

ものみの塔の言うように、仮にそれが「霊的食物」であり、神の導きによって得られたという情報を印刷物にして配布しているとしても、それは、食物の供給源になったわけではないでしょう。

もし彼らが自分たちを「食物の供給源」だと言うならそれはすべて「人間から出たもの」ということとなります。

神からの霊的「食物を配る、供給する」ということは、その後何の修正も必要もない完璧

な情報を知らせていたとしても、そして、神とクリスチャンとの「伝達の経路」であると誇示して見せたとしても、どこまで行ってもその文書冊子の配布組織は、現実には、「従業員としてのコピー係」と、指して変わることはないように思えます。

「配膳係の奴隷」=現代の「コピー係の従業員」のようなものと表現しても一向に差し支えないでしょう。

従業員としてコピー係を頼まれたのを「任命」されたと表現する人が身近にいたらあなたはどうか感じますか。

あるいは、例えば上司から、「〇〇さん、ちょっと、部の皆さんにお弁当配って世話してくれるかな？」と頼まれた場合、「部長から直々にお茶入れ長に『任命』された」と考える人がいるなら、当の上司は、どんなリアクションを示すでしょうか。

「単に、頼んだだけなんだが」と失笑されるのがオチでしょう。

例え話で語られているのは、立場も「奴隷」であり仕事も「食物分配」です。別に大抜擢とも言えない、何も特別なことはないごくありふれた普通の出来事です。

つまり、マタイ 24:45 の「カティステイミー」を「任命」と訳すのは、文脈から言って明らかに「不適切」だということです。

ゆえに多くの日本語訳は下記のように訳しているのです。

「彼らに食事を与え【させることにした】」新共同訳

「主人が家政を【托した】とき」前田訳

「その家のしもべたちを【任されて】」新改訳

「時間時間に食事を与え【させることにした】」塚本訳

「時に応じて食物をそなえ【させる】」口語訳

以上のことから分かるのは、「例え話」というものはそもそも、話された目的やその適用に関わる幾つかの点以外は、別の語句やストーリーに置き換えても差し支えないということです。

だから、同様のことを述べている「タラント」の話では、「食物」が「タラント」に、「よこしまな奴隷」は「怠け者の悪い僕」などに置き換えられた別の物語になっているのです。また、「忠実な奴隷」の話もルカの方の記述では、微妙に語句が他のものに入れ替えられています。

次に挙げるマタイとルカの記述を比較して見てください。

「仲間の奴隷たちをたたき始め、のんだくれたちと共に食べたり飲んだりするようなことがあるならば、その奴隷の主人は、彼の予期していない日、彼の知らない時刻に来て、最も厳しく彼を罰し、その受け分を偽善者たちと共にならせるでしょう。」-マタイ 24:49-51

「下男や下女たちをたたき、食べたり飲んだり酔ったりし始めるならば、その奴隷の主人は、彼の予期していない日、彼の知らない時刻に来て、最も厳しくこれを罰し、その受け分を不忠実な者たちと共にならせるでしょう。」-ルカ 12:45,46

特に注目したいのは「仲間の奴隷たち」が「下男や下女たち」に置き換えられている点です。ここで今一度、冒頭に引用した「ものみの塔」の次の1節を呼び戻してみましょう。

「忠実で思慮深い奴隷が仲間の奴隷たちをこのように虐待することがあれば、主人は到着した時にこれこれの行動を取る」と言っておられたのです。」-***「もしそのよこしまな奴隷が……」からの引用 ***

「仲間の奴隷」とは「忠実で思慮深い奴隷」（であることを期待して仕事を託された者）のことであり、「召使い」のことではありません。

問題点がお分かりでしょうか。次に上の引用文の前の方の一文をご紹介します。

「9 地上にいる油そそがれた者全員が忠実な奴隷を構成するのでしょうか。そうではありません。事実から言えば、すべての油そそがれた者たちが、世界中の兄弟姉妹に霊的食物を分配する務めを担っているわけではありません。小麦の中には、地元の会衆の奉仕の僕や長老として奉仕する油そそがれた兄弟たちもいるでしょう。彼らは家から家でも会衆でも教え、本部からの指示に忠節に従います。それでも、世界中の兄弟たちに霊的食物を分配する仕事には参加していません。また、油そそがれた者の中には、謙遜な姉妹たちも含まれています。姉妹たちは決して会衆の教え手になろうとはしません。」***「ものみの塔」「忠実で思慮深い奴隷はいつたいだれでしょうか」9節からの引用 ***

「忠実で思慮深い奴隷」は「統治体」を構成する少人数の男子だけだと主張しているわけですが、聖句は「忠実で思慮深い奴隷」と同じ仲間を「下男や下女たち」と述べているということなのです。

支配権を独り占めしたかった「統治体」は、相当に無理のあるロジックを駆使して、新たな教理を生み出したつもりでいるのですが、こんな簡単なことでボロが出て、そのインチキが見破られたことを知ったら、また例の「漸進的な導き」によって新たな方便を考

え出すのかもしれませんが、とにかく、これで完全に墓穴を掘ってしまいました。
「統治体」なるものが、全くの非聖書的なものであることを、自らの手で暴露、証明していることになぜ気づかないのか不思議です。

こんないい加減な教理を次々と「ものみの塔誌」に載せて、世界中に配り、それを神からの霊的な食物と呼んでいます、「食物」どころか豚の餌にさえならない代物です。

最後に、この「忠実で思慮深い奴隷」の話は、誰に対して語られたのかを記して終わりたいと思います。

この例えのルカの方の記述では、この話を始めることになる切っ掛けがあったことが記されています。

「このことを知っておきなさい。家あるじは、盗人がどの時刻に来るかを知っていたなら、ずっと見張っていて、自分の家に押し入られるようなことは許さなかったでしょうあなた方も用意をしていなさい。あなた方の思わぬ時刻に人の子は来るからです」。

その時ペテロがこう言った。「主よ、この例えはわたしたちに話しておられるのですか、それとも、みんなにもですか」。すると主はこう言われた。「主人が、時に応じてその定め
の食糧を……」 - ルカ 12:39-42

ペテロが、私たちに、みなにもか。と訪ねているのは、次のような状況の流れがあったからです。

「おびただしい群衆が集まって来て互いに踏み合うほどになったが、イエスはまず弟子たちにこう言い始められた。(12:1) (1-7 までは弟子たちに)

「それで、あなた方に言いますが、人の前でわたしとの結びつきを告白する者は皆…」
(12:8)

「群衆の中のある者が彼にこう言った。「師よ、わたしの兄弟に、相続財産をわたしと分けるように言ってください」。イエスは彼に言われた」(12:13,14) (8-21 までは群衆に)

「それから、[イエス]は弟子たちにこう言われた。」(12:22) (22-40 までは弟子たちに)

「思わぬ時に人の子は来るから、用意をしていなさい」(これは例えではない)

このキリストの言葉の後、ペテロは先の質問をしているのです。

それに答えてイエスは「忠実で思慮深い奴隷」の例えを話され、その後半で、マタイにはない次のような言葉を付け加えておられます。

「その奴隷の主人は、彼の予期していない日、彼の知らない時刻に来て、最も厳しくこれを罰し、その受け分を不忠実な者たちと共にならせるでしょう。

その時、自分の主人の意向を理解していながら用意せず、またはその意向にそって事を行なわなかったその奴隷は、何度も打ちたたかれるのです。

しかし、理解していなかったために打たれるべきことをした者は、少なく打たれます。実際、だれでも多く与えられた者、その者には多くのことが要求されます。

そして、人々が多くをゆだねた者、その者に人々は普通以上を要求するのです。」 - ルカ 12:46-48

ここで「理解」と訳されているのは（ギリ語：ギノスコ）で「知る、認識する、知覚する」とい意味です。新世界訳以外は全て「知って」と訳しています。

「自分の主人の意向を知って」いるはずなのは弟子たち、つまりクリスチャンです。

「知らなかったために打たれるべきことをした者」は「群衆＝非クリスチャン」つまり「普通」しか要求されない一般の諸国民の中の比較的大勢でしょう。

つまり、「忠実で思慮深い奴隷」の話は『「弟子たち」に対してだけでなく、「群衆」に対してもその両方、『ここにいるすべての人に対して私はこの「例え」を話しているのです。』というのがペテロの質問に対するイエスの答えででした。

人により理解力などの様々な能力は異なりますし、福音などをどの程度正しく知らされたかなど、時代や環境や状況の違いがあるため「主人の意向を」知っている度合いも個々に異なることでしょう。

ですから、「多く与えられた、多く委ねられた者」という表現は、「主人の意向をより多く知っているはずの者」と言い換えることができるかもしれません。

そしてまた、「弟子」と「群衆」の違いは、「与えられ、委ねらる」ものが、前者では「多少の問題」で後者では「有無の問題」だということも分かります。

「与えられ／委ねられた者」とはクリスチャンに限定されます。

多く与えられた者がいるということは、少なくしか与えられなかったものもいるということです。それは「タラント」の話でよく分かります。

個人の状況の故に結果への期待の大小はあるでしょうが、クリスチャンには全員に主人から任されたものがあるということです。

すなわち聖書のどこをどう読んでも明らかですが「食物を備える仕事」（おそらく自分の信仰や希望の謂れを他の人と分かち合うこと）は全クリスチャンに期待され、任されている（「ギ語：カティステイミー）と言って良いでしょう。

ともかくこの例えは、言わば「全人類に向けたもの」とイエスご自身が言っておられる訳ですから、冒頭に引用した「ものみの塔」が「このイエスの警告は、実際には、忠実で思慮深い奴隷に向けられたものです。…」と断言しているのは、完全に間違いです。

[この記事に追加された記事を開く](#)